



佩斯達篤

卷四

ヤ 4
1435
4





侃斯達篤卷之四

侍醫法眼 坪井良信良譯

出血

出血トハ、脈管破裂シテ、血液漏泄スル者ナリ、

古人ハ脈管破裂ニ由ル出血ト、脈管損傷スル

ニ非スノ、血液滲出スル者トヲ區別ス、方今ワ

トソシ氏等、尚此説ヲ唱フレ、今之ヲ取ラス、

若シ夫レ脈管ノ氣孔大ニシ、血液ヲ滲出スル

ニ足ル者ナルキハ、之ヲ顯微鏡ニ照ラセハ、明

侃斯達篤卷之四

出血

一

刀白婁卒



亮ナルヘキニ、未タ之ヲ見ルナシ、ヨ子ス氏、
 ワトソン氏曰ク、血體ハ能ク自家ノ大サヨリ
 狭キ脈管ノ氣孔ヲ通過シ得ル者ト、然レ此
 說固ヨリ無稽ノ空論ナルノミ、近今諸家皆曰
 ク、脈管先ツ破裂スルカ、或ハ穿開スルニ非サ
 レハ、血液管外ニ出ツルヲ得スト、故ニ氣孔
 ヨリ滲出スルノ說ハ、自ラ廢セリ全身病、神經
 聖京屈、失苟兒陪苦等ニ發スル出血モ、血ノ赤
 分溶解シテ、沕乙液ニ混スル者トスレ氏、真ノ
 血體ヲ見ルナリ、故ニ是レ必ス脈管ノ凝收

力衰弱スルカ、或ハ局部血液鬱積、歛衝シテ、脈
 管破裂スルニ由ルナリ、死後顯微鏡ニテ検査
 スルニ脈管ノ破裂スルヲ見スト雖、是レ未タ
 以テ證ト為スニ足ラス、

出血本性

凡ソ全身各部一モ出血セサルノ地ナシ、但レ一
 器、一部ノ容易ニ出血スルハ後ノ數件ニ由ル、一
 血液多ク、脈管多キ者、脾ハ多血ノ部ナレ氏、其組
 織彈力ヲ具スルカ故ニ、破裂スルヲモ、出血スル
 一モ稀ナリ、二組織軟脆、脈管脆薄ナル者、三外因

ニ接スル者、鼻、肺、腸ノ如シ、**四**其部ノ平態、血液鬱積ニ慣ル者、子宮ノ如シ、

故ニ出血スルヲ最モ多キ部ハ、

一粘液膜、是レ脈管多ク、組織柔軟、且ツ其細管外面ニ至ルノ道短カキニ由ル、又粘液膜ノ主用ハ、分泌機能ナルカ故ニ、常ニ血液鬱積スルノ僻アリ、抑モ粘液膜表面ハ、血液容易ニ外ニ漏泄スルカ故ニ、之ヲ自在出血ト稱ス、

二之ニ次テ出血シ易キ部ハ、巴連舎麻器、殊ニ多血ノ分泌器、肺、子宮、腎ナリ、肝ハ、其質牢實ナ

ルカ故ニ、出血稀ニシ、且ツ極テ微量ナリ、

三腦、殊ニ細脈管極テ微細緻密ノ部、其底面、及ヒ靜脈叢ノ如シ、

四稀ニハ、沔乙膜、心囊、腹膜、辜丸ノ莢膜出血スルヲアリ、

五又皮下ノ柔軟組織中ニ出血スルヲアリ、出血ニ巴連舎麻出血、空隙出血ノ別アリ、頑癬、

癌腫等ヨリ出血スルヲアリ、人或ハ曰ク、出血スルニハ必ス先ツ其部ニ血液

鬱積ス、痔血、月經ハ、則チ出血ノ本性ヲ知ルニ足

ルト、然レモ此説ハ非ナリ、今夫レ肺勞ニ於ケル
 カ如ク、脈管損傷スルヲアレハ、容易ニ出血ス、是
 レ必シモ血液鬱積シテ、後出血スルニ非ス、
 多血ヨリ發スル急性出血ハ、常ニ先ツ多血症ヲ
 發ス、則チ患部神經覺機常ヲ失シ、刺衝亢起シ、牽
 張、壓重、炎熱、鼓動ヲ覺エ、外部血液鬱積、赤色、温度
 増進シ、分泌器ハ分泌増多シ、粘液膜ハ稀液ヲ流
 泄シ、又或ハ分泌閉止シ、患部ノ機能多少障害セ
 ラルハアリ、又一部血液鬱積スルニ由テ、桔槔機
 ヲ發シ、他部遠隔ノ地ニ於テ、血液減少スルヲア

リ、内部ノ器械ニ於テ大出血アレハ、多クハ、惡寒、
 戰慄、四肢、皮膚、厥冷、蒼白色トナル、脈大、強、疾、數、重
 復、以テ血行不整ヲ知ルニ足ル、已ニ出血スレハ、
 脈多クハ軟ニシテ緩トナル、各種ノ出血、肺血、胃血、
 等自ラ固有ノ症アリ、今之ヲ記セス、出血スルノ
 經過、長短、數、様アレモ、多クハ多血ヨリ來ル所ノ
 一時ノ症ナリ、
 脈管中血液鬱積シテ、大ニ牽張シ、次テ破裂シ、
 多血、瘀衝ヲ生シ、以テ出血スルヲアルハ、固ヨ
 リ知リ易キ所ナリ、此症ハ所謂血液溢出ニシ、

滲出液中凝固スルノ血ヲ混ス、此滲出ヨリノ
 真ノ出血ニ轉スル者ハ少ナシ、血液鬱積スル
 一愈多ク、患部ノ組織愈軟脆、愈鋭敏ナレハ、滲
 出液中血ヲ混スル一愈多シ、故ニ肺、腦等ノ焮
 衝、或ハ柔軟ナル癌腫等ハ、滲出液中血ヲ混ス
 ル一多シ、

出血ノ真徵ハ、外部ニ血液漏泄スルナリ、初起多
 クハ、分泌液中少シク血ヲ混シ、次テ純血ヲ漏泄
 ス、其血徐々ニ滴瀝スルアリ、多血質、或ハ一時ニ
 漏泄スルアリ、血液溢出、或ハ頻ニ出血スルアリ、

其量少許ナルアリ、又極テ多量ニシテ數斤ニ至ル
 アリ、其遲徐ニシテ間歇スル者ハ、全量極テ多キモ、
 患者能ク之ヲ堪フル者ナリ、卒然頓發ノ者ハ、四
 斤、六斤ナレハ、大ニ危険ナリ、

漏泄スルノ血、其色數般ノ別アリ、少壯ノ人、横
 膈膜ヨリ上ニアル器械ヨリスル者、多血ヨリ
 来ル者、脈管外ニ出テ早ク漏泄スル者、酸素ニ
 接スル者、肺血ハ、鮮紅ナリ、之ニ反シテ、老年ノ
 人、腹部諸器ヨリ出ル者、虚性多血ニ屬スル者、
 漏泄シテ後久シク空隙内ニ潴留スル者、炭素

ヲ含ムノ物質、膽汁酸敗液ニ接スル者胃血ハ、暗赤、褐色、黒色ナリ、又其純質ナルアリ、或ハ他物空氣、泡沫ヲ帶フ粘液、食物、膿液、加爾基性物質、水液、小便等ヲ混シ、大ニ其質ヲ變スル者アリ、又流動スルアリ、凝結スルアリ、管狀ヲ為スアリ、又漏泄スルノ後、凝結スルノ遲速、一ナラス、或ハ遂ニ凝結セサルアリ、或ハ上面一層ノ纖維質ヲ被ムルアリ、溶崩スルアリ、臭氣アルアリ、酸様、甘様、苦様味アルアリ、

出血後直チニ患所ニ為スノ作用、左ノ如シ、

一 出血前多血ナルノ部、今大ニ疎通シ、血液鬱積スル者快利シ、従前ノ諸症消散ス、呼吸短促ノ者肺血後ハ胸部寛暢ス、頭痛及ヒ腦ノ壓重スル者、血後ハ輕快ヲ得、熱勢减退シ、全身爽活ナルヲ覺ユ、

二 或ハ出血スルモ、患部未タ其多血ヲ免カルヲ得ス、或ハ出血スルニ由テ、其部機能快達シ、却テ更ニ多血トナルアリ、出血留連持續スルアリ、又間歇シテ復發スルアリ、或ハ血液鬱積スル者、終ニ瘀衝ニ陷ルアリ、

三 滲出スルノ血液、速カニ漏泄シ去ラサレハ、其部ヲ壓迫シ、或ハ之ヲ破裂セシメ、或ハ之ヲ閉塞ス、機能ヲ妨クルヲ甚シケレハ、其極麻痺スルニ至ル、肺、氣管ニ血液充盈スレハ、煩悶、窒塞ス、腦血ニハ卒仆スル等ノ如シ、血液空隙内、沕乙膜中、子宮内ニ於テ凝結スレハ、機能ヲ障害スルノ症、早ク發セス、血管空虚トナリ、萎黄色ヲ現シ、卒倒スルニ至テ始テ見ルヘシ、

四 血液一半ハ漏泄シ去レ、一半ハ周圍ノ組織内ニ潑留スレハ、血腫ヲ生シ、以テ其部ノ機能ヲ

妨ク、

解剖症候

一 出血ノ本原、多血ヨリ来ル者ハ、其症候、多血症候ト異ナルヲナシ、敗血、又衰弱ヨリ發スル者ハ、必ス其本病ノ症候ヲ發ス、

二 出血後ノ症、一 脈管ノ表面、膜上、空隙内、巴連舎麻内ニ、血液溢出し、凝結シテ其部ノ形狀ニ從フ、巴連舎麻ヲ損傷シ、破裂スルヲ、各々差等アリ、腦、肺、肝ニ於テハ、所謂卒中狀症ヲ為ス、肺ノ巴連舎麻破裂スルカ如キハ、更ニ空隙内ニ溢出ス、出血

ノ量、少キ者ハ二三滴、多キ者ハ數斤ニ至ル、大脈管、殊ニ動脈破裂ヨリスルノ出血ハ、細脈管出血ヨリハ常ニ必ス多量ナリ、又被色セサル部ノ出血ハ必ス多量ナリ、二近傍ノ部血液浸滲スレハ、或ハ同狀ニ蔓延シ、或ハ斑點狀潰爛トナル、出血ノ部ヨリ遠隔スルノ部ハ、沝乙狀ニ軟解ス、浸滲セル組織ヨリ血液滴瀝滲出ス、或ハ出血スルノ部、全然血液ヲ失シ、灰白、脈管消滅ス、腦、肺、又胃腸粘液膜出血ノ如シ、三或ハ稀ニハ、大脈管破裂スル者アリ、四大出血後ハ、諸部血液乏少トナル、沝

乙膜空隙ニハ、心囊、胸膜、稀液滲出シ、諸臟ハ色ヲ失シテ軟解ス、但シ腦ノ脈管ハ、之ヲ他部ニ比スルニ血液充盈ス、
三出血後時日ヲ經レハ、其症狀ヲ變ス、漏泄ノ血液溶解シテ、沝乙分ト、纖維質凝固分ト離拆ス、而シテ凝固分ハ、空隙内ニテハ黑色トナリ、沝乙液上ニ浮泳ス、沝乙液ハ巴連舎麻質内ニテハ膨腫ヲ生ス、又滲出液吸收シ去ルテ屢之アリ、殊ニ極テ迅速ニメ、其力驚クヘキ者アリ、故ニグリユゲ氏ハ血ハ凝結スルモ極テ吸收シ易キヲ、水ニ次ク者

ナリトス、

グリユゲ氏及テイイル子スセ氏、一千八百四十五年、第八月四日、試ニ肥大壯實ナル二犬ヲ捕ヘ、甲ハ胸膜ノ囊狀部、乙ハ腹膜腔ノ左邊ニ於テ、大畧二亨許ノ出血ヲ為サシム、而シテ第九月九日ニ及テ、此二犬ヲ殺シ、驗スルニ、少シモ出血ノ痕跡ヲ見ス、沕乙膜ノ創所ハ、全然愈合シ、少許ノ滲出液ヲ見ス、

赤分ハ吸收シ去ルテ最モ遅キ者ナリ、何トナレハ、必ス褐色、或ハ黒色トナリ、凝結シ、出血スルノ部ニ於テ、久シク消滅セサレハナリ、ヒルシヨウ氏纖維質分泌スルテ多ケレハ、凝固シテ細脈管閉塞シ、又周圍ノ部ニ激衝、或ハ滲出アレハ漏泄セル血液ノ流動分モ、恰モ被色セララル、カ如クナルニ由テ、滲出液ヲ吸收スルテ極テ難キ者アリ、是レ頭腦、蛛絲膜囊中出血ニ於テ、屢見ル所ナリ、周圍ノ滲出ヨリ、纖維質、新組織ヲ生シ以テ血液ヲ被色シ、其吸收ヲ妨ケ、之ヲ遅徐ナラシムルテアリ、此等ノ際ニハ、其液漸々稀薄透明トナリ、遂ニ灰白、赤、黄、或ハ全ク無色ノ液ヲ遺ステアリ、

吸收全キヲ得レハ、曾テ出血セル空隙内ノ兩側相愈著シ、多クハ黄色、或ハ赤色ノ斑痕トナル、

夫レ滲出スルノ血液、能ク機性體トナルヘキ者ナルヤ、緊縛セル動脈ニ生スル血腫瘍ニ於テ、纖維質凝固シ、其内ニ新脈管ヲ生シ、又更ニ整然タル纖維ヲ生スルヲ見ル、是レ此說ノ因テ起ル所ナリ、ダルレイムプレ氏、夫苟兒陪苦性出血中、膝膈ニ於テ、蜂巢體、及ヒ纖維質發生スルヲ説ク、グリユゲ氏ハ、人身及ヒ馬體ニ於テ、全然成形ノ血瘍、又所謂心臟息肉等、以テ其

成形スヘキノ證トナス、レインハルドト氏ハ、滲出セル纖維質ハ、有機成形ヲ為ス者ニ非ストス、而ノ却テ曰ク、血瘍内ニ新組織ヲ生スルハ滲出セル血液ヨリ發スルニ非ス、溶解セル細胞片ヨリ生シテ、凝固セル纖維質中ニ入ル者ナリ、整然タル纖維ハ之ヲ見ルコトナシ、唯時日ヲ經ルモ亦初ノ如シ、或ハ稀ニハ球狀蜂巢體恐クハ膿球ノ變形ヲ見ルコトアルノミト、出血ノ全身ニ關係スル、症狀、
一 出血ニ發スル全身抵抗、

出血 十 初白樓梓

出血速カニ體外ニ漏レ去ラサレハ、其近接スルノ部ヲ刺戟シ、隨テ交感諸症ヲ發シ、咳嗽、嘔吐、下利、膀胱窘迫、子宮疼痛、集積スル所ノ血液ヲ排去シ能ハサレハ、或ハ其部ノ機能ヲ障害シ昏睡、腦麻痺、或ハ大ニ之ヲ奮起ス、謔妄、搐搦、牽縮、若シ交感運營ヲ發スルモ、之ヲ排去シ能ハサレハ、周圍ノ部、刺戟ヲ受テ、焮衝ヲ生シ諸般ノ續病、膿化、硬結、變質等ノ原トナル、

二 出血全身ノ功用、出血ニ發スル所ノ真ノ功用ト、又其出血ニ併發スルノ病機抵抗トヲ、混ス

ルヲ勿ルヘシ、肺臟血液鬱積スレハ、必ス急性熱ヲ發シ、次テ出血ス、此時熱留連スレモ出血ニ發スルノ抵抗ニ非ス、出血發熱、兩ノ者、共ニ同一原因ニ起ル所ナリ、

甲 卒然頓發出血ノ續症ハ、急性脱血、蒼淡色、唇、舌滲淡、下肢厥冷、脈小、眩暈ヲ發シ、起立スレハ最モ甚タシ、外部皮膚ノ脈管萎縮シ、前額冷汗ヲ流シ、四肢震掉、苦悶甚タシク、顔貌大ニ變シ、卒仆ス、此等ノ諸症、常ニ必シモ脱血ノ徵タルノニニ非ス、或ハ出血ニ由テ發スル所ノ驚駭ニ起ルヲアリ、

卒仆ハ腦髓、脊髓ニ必要ナル刺戟物、即チ血液減損ニ由テ發スル所ナリ、是ニ於テ腦ノ機能廢止假死、麻痺、痙攣、嘔吐等ヲ發ス、卒倒或ハ死ニ至ル者アリ、或ハ出血閉止ノ媒トナルヲアリ、卒倒ヲ發スルノ遲速ハ、出血ノ多寡、遲速ノ外、更ニ患者ノ體質ニ係ルナリ、多血ノ人、瘦削セル人、婦人ニ於テハ、血液全量ノ三分ノ二ヲ失スルニ及テ、始テ假死、卒倒ヲ發ス、但シ肥滿セル人ハ、却テ全量ノ四分一、若クハ八分ノ一ヲ漏泄スレハ、直テニ卒倒、假死ヲ發ス、スタルク氏

乙 出血閉止スレハ、直チニ珠ニ少年ノ人ニ於テハ、全身抵抗ヲ發ス、又出血後少時ニメ、肌熱増進、脈大、洪、心悸動、顛顫、頸動脈鼓動、及ヒ他ノ刺戟諸症、頭痛、不寐、譫妄、羞明、耳鳴等ヲ發ス、出血後即時ニハ、此諸症最モ甚タシ、時ヲ過クレハ、漸次ニ鎮靜シ、二三日ニメ全ク消滅ス、此諸症ヲ發スルノ原、一ハ血液乏少スルカ故ニ、全身彈力ヲ失シ、平均ヲ傷ルニ由テ、刺衝機亢起スルニ在リ、一ハ水液ヲ吸收スルノ機能盛ナルニ在リ、

出血原因、及區別、

出血ノ近因ハ、上ニ記スルカ如ク、脈管ノ破裂ナリ、而ノ之ヲ為スノ原ハ數般ナリ、

一外部損傷、或ハ破裂、創傷出血、腎ノ部大ニ打撲スレハ、多量ノ血尿ヲ漏ス、頭部ヲ劇シク震掉スレハ、腦膜間出血スルカ如シ、

二脈管實質所患アルニ由テ、其固性ト彈力トヲ失スレハ、血液ノ輻進ニ堪ヘスノ破裂ス、此類ハ動脈軟解、又加爾基性變質ナリ、是レ小腦細脈管ノ大ニ脆弱ナル者ニ於テ見ルカ如シ、

三血液過度ノ鬱積ニ、形質ニ由ル者ト、作用ニ由ル者トノ別アリ、而症共ニ脈管大ニ膨脹シテ、終ニ破裂シ、出血ヲ發ス、多血焮衝性滲出、亦之ニ屬ス、

器械性原因、ブール、ハー、氏、獸ノ門脈ヲ緊縛レテ腸出血ヲ起セリ、出血ノ原、唯ニ其上部ノ靜脈枝末ノ器械性消滅ニ由ル者アリ、妊婦子宮ノ壓迫ニ由テ發スル者ノ如シ、吐血、黒病、亦同因ニ由テ發ス、心病アレハ靜脈血諸部、多血ヲ起シ、遂ニ出血スルヲアリ、腦、肺等ニ於テ

作用性原因ハ、一外ヨリ来リ、体内ニ入ルノ物
 質、一部ニ於テ、多血ヲ起シ、遂ニ出血ス、蘆薈、薩
萘那ハ、腸血ヲ發シ、芫菁ハ腎血ヲ發スルノ類
 二大ニ脈管系ヲ衝動スル者、疾走、舞躍、情意感
 動及ヒ他ノ神經刺戟、起熱ノ飲料、又凡ソ急性
 焮衝ノ原因トナル所以ノ諸件、三大動脈軟解
 スレハ、之ヨリ營養ヲ受クルノ細脈管ハ、彈力
 ヲ失スルヲ以テ、血液充盈シ、破裂スルニ至ル、
 是レ腦ニ於テ屢見ル所ナリ、四尋常出血、痔血、
 經血、又尋常排泄、發汗、下利等閉止シ、之ニ交代

シ、或ハ桔槔機ニ由テ、他部ニ出血スルアリ、
肺、胃等

四敗血ニ由ル者敗血、失苟兒陪苦、發斑病、神經聖
 京屈、及ヒ他ノ血液調和ヲ失スル諸病、中毒、脾病
 等ノ出血、皆是ニ屬ス、此類ノ出血モ、脈管ヲ滲出
 シ来ル者ニ非ス、必ス先ツ破裂スルヲ已ニ上ニ
 記スルカ如シ、全身ノ疾病、多血、鬱積、血液溶解ス
 ルニ由テ、脈管弛緩スレハ、則チ出血ノ原タルヘ
 シ、然レモ未タ正證ヲ得ス、
 極テ少許ニテ、顯微鏡ニテ纔カニ見ルヘキノ

出血ハ、他ハ無患ノ部ニ發シ、又血液調和ヲ失
 スルニ由ル、子ルレ氏、コルリケル氏ハ、必ス小
 蟲ノ咬傷スルアリト云フ、此ノ如キ出血ハ日
 常見ル所ナレト、必ス脈管損傷ニ起ル者ナレ
 ハ誘發ノ因ヲ得テ、忽チ顯著トナリ脈管彈力
 ヲ失スルト、血液凝固質ヲ失スルニ由テ、愈盛
 ナリ、

治療家ハ、出血ニ實性、虚性ヲ區別ス、抑モ多血ニ
 實性、虚性ノ別アルニ基クナリ、第四號記スル所
 ノ出血ハ、敗血ニ由テ發スル者ニシテ、虚性ニ屬ス

ヘク、他類ハ皆實性ニ屬スヘシ、

通常稱スル所、辨別症候左ノ如シ、

實性出血

虚性出血

必ス固有ノ刺戟アリテ、誘發スルノ刺戟ナシ、
 之ヲ誘起ス、外因、内因

身體某ノ部、血液鬱積ス、其原、固形部、流動部、全身

ノ景况ニ由ル、故ニ之ヲ

發スルノ部多シ、殊ニ多

液ニシテ、蜂巢狀組織ヲ具

シ、且ツ脈管多ク、或ハ口

ヲ外部ニ開ク所ニ於テ	發シ易シ、	多血強壯ノ人、美食飲酒	ニ慣ル、人、少年ノ人、多	ク之ヲ發ス、	誘發スルノ因ハ、刺戟物	情慾感動、起熱ノ事件日	常習僻トナル所ノ出血	閉止等、
		虛弱老年ノ人、弛緩質ノ	人、疾病、麁食、悲憂等ニ由	テ、精神及ヒ體軀疲勞ス	血液汚敗、又零氣ノ變異、	能ク之ヲ發ス、		
				ル者、				

呼吸器ノ動脈系ヨリ發脈管多キ腹部ニ發スル	スル者、	必ス前徵ヲ發ス、多血、出	血スヘキノ部、肌温増加	ス、	肌温増加、脈大強、出血ノ	間ハ、脈軟緩トナル、		其血凝結シテ、纖維質ノ
者、		多血鬱積ノ前徵ナシ、			脈小ニノ軟、或ハ始ノ大	ニノ軟ナル者、忽チ壓迫	ナル、	漏泄スルノ血凝結セス、
						シ、出血間漸次ニ弱數ト		

皮ヲ結フ、總テ焮衝血ニ多クハ暗色、汚色、或ハ黒
類似ス、色、或ハ鮮紅ニシテ水ノ如ク、屢出血スル者ニ於テ

ハ肉羹汁ニ似タリ、

多クハ卒然頓發シ、或ハ出血スルヲ漸ク多ク、且
間歇ス、ツ留連ス、

出血スルニ應シテ、多血
症減退ス、脱諸症増進ス、

之ヲ閉止シ易ク、或ハ自
ラ止ム、患者多クハ爽快
患者大ニ虚脱スルヲ覺

ヲ覺ユ、

ユ、



以上記スル所、辨別症候極テ精密ナルカ如シト
雖、嗚呼施治ノ際、以テ足レリトスルニ非ス、出血
實性ノ症候アリト雖、衝動劑ヲ用ヒテ、始テ治ス
ヘキ者アリ、又之ト相反スル者アリ、故ニ合併症
ノ出血ニハ、醫者精細ニ注意シ、局所出血部ノ景
況ト、全身景況トヲ混スルヲ勿ルヘシ、甲ハ虚性
ニシテ、乙ハ實性ナルアリ、或ハ之ニ反スル者アリ、
治法ハ全身ノ景況ニ隨フヲ最佳トス、之ヲ例ス
ルニ、劇甚ノ器械性震掉ニ由テ發スル出血ナレ

此其部固ヨリ衰弱シテ、脈管中血液大ニ輻進スルニ由ル者アリ、又始ハ實性出血ナルモ、經過間虚性ニ陥ル者アリ、

出血ノ多少、部位景況ニ關係スル諸因アリ、

一年齡 血液循環ノ引力、發育力ニ由テ增多ス

ルノ人ニ於テハ、最モ出血シ易ク、小兒ハ頭部多血ナルカ故ニ、髒血ヲ發シ易ク、少年ノ人ハ胸部多血ナルカ故ニ、肺血ヲ發シ易ク、中年ハ腹部多血ナルカ故ニ、胃血、腸血、痔血、腎血ヲ發シ易ク、老年ニ及ヘハ、脈管柔軟ノ質ト、彈力トヲ失シ、流通

スル血液トノ平均ヲ失スルカ故ニ、脈管破裂シ、損傷シ易シ、

二種族 婦人常トスルノ經血、妊娠中、又産後出

血、惡露等、出血症多キ所以ナリ、且ツ神經統系、感動銳敏ニシテ、血液製造ノ機盛ニ、又彈力少ナキカ故ニ、虚性出血ニ陥リ易キノ理ヲ知ルヘシ、又婦人體格、出血ノ素因ハ、製血機能發動ノ期ヲ最モ盛ナリトス、則テ天癸始テ至ル時、經行、出産ノ時、又時季更換ノ候是ナリ、時季ノ更換ニ感動シテ久シク多血、出血ノ素因ヲ有シ、遂ニ内部生殖器

及ヒ他部變質ノ原トナル者多シ、婦人ニ於テハ、
子宮ハ最モ出血シ易キノ部ナリ、襲替出血ハ何
レノ部ニモ之ヲ發ス

男子ハ出血スルコト少ナシ、或ハ之ヲ發スレハ多
クハ實性急性ナリ、

三 零氣壓力減少、全身ノ流動部ト、固形部トハ、
相抵抗シ、更ニ周圍ノ零氣ト相抵抗シテ、平均ス
ル者ナリ、故ニ體外ノ零氣變異スルコトアレハ、忽
チ平均ヲ失ス、其變異スルコト愈迅速ナレハ、抵抗
衰弱スルコト愈甚タシク、脈管彈力ヲ減シテ、血液

恣ニ擴排ス、故ニ晴雨器俄カニ昇降シテ、陰晴忽
チ更リ、寒暖急ニ變スルニ方テ、各地ノ人、一時ニ
出血スルコトアリ、レイル氏曰ク、血尿病流行シテ、
健康ノ人モ之ニ感スルコトアリ、フランク氏曰ク、
零氣頓ニ燥濕ヲ變スルキハ、出血流行スルコトア
リト、

コメル氏曰ク、腸血、尿血、子宮血ハ、温時ヨリハ
寒時ニ多ク、鼻血、肺血ハ冬日ヨリハ、夏日ニ多
シト、

高山ニ登レハ、鼻、口、眼出血シ、又頓ニ身ヲ水中ニ

投スルモ出血ス、蓋シユノド氏装置ノ大排氣鐘
ニテ、零氣ノ壓力ヲ減シ、以テ經血ヲ誘發スルノ
法ハ、同上ノ理ニ基クナリ、又所謂虚性出血ハ、其
症狀虚性多血ト同シ、腦質軟解シテ、腦腔出血ス
ル亦此類ナリ、

經過及終歸、

一回ニテ止ムアリ、數回發見スルアリ、而シテ其發
見スルニ、時日不齊ナルアリ、又整然定則アリテ
數日、數週、數月ヲ期スルアリ、
其部ノ本性、若クハ疾病ニ由テ、一回或ハ數回

出血スルノ部ハ、少許ノ誘因アレハ、復々出血
シ易シ、而シテ遂ニ或ハ常僻トナリ、若シ閉止ス
レハ、則チ疾病トナル者アリ、其發見スルノ期
ニ至レハ、多血症ヲ發シ、出血シテ分利ス、

一 局部續症

出血治愈スレハ則チ閉止シ、其凝

固セル分ハ、外部ニ口ヲ開クノ空隙内ニ排除シ、
腔内ニ生スル滲出液ハ、吸收シ去リ、或ハ潑留シ、
補給機増進スルニ由テ、更ニ周圍ノ組織ニ變ス、
粘液膜ノ出血ハ、分泌增多シテ止ム、
聖京堡多血ヲ排除スルカ為ニ發スル局部抵抗増進スル者、

遂ニ焮衝トナルアリ、出血スルノ部焮衝ヲ生シ、
更ニ近接ノ部ニ於テ、出血スルヲアリ、肺
出血後患部ニ多血滲出等アリテ、結節、癌腫、變質、
膿化、膿瘍等ノ續病ヲ發スルアリ、

二全身續症 多量頻回ノ出血ハ、全身乏血トナ
リ、本條記スル所ノ諸症ヲ續發ス、刺衝機亢起ス
ルニ由テ、心悸動、頭項強痛ス、此症ハ脱失スルノ
血量ヲ、他液ヲ以テ償フニ非サレハ、遂ニ治セス
故ニ醫者其症ヲ見テ、鬱積或ハ多血ヲリトシ、心
悸動ヲ見テ、心臟器械病ナリトシ、妄リニ減損法

ヲ處スルヲ勿レ、
頻回出血スレハ、血液脱力シ、補給機大ニ衰弱シ、
赤分ト纖維質トノ比例ヲ失シ、唯赤色ノ稀液ト
ナルノミ、固形部亦其固性ヲ失シ、水様ノ稀液、細
管外ニ滲出シ、虚性水腫又弛緩スル脈管ハ、輕微
ノ誘因アレハ、則チ破裂シ、以テ前回ノ出血ハ更
ニ後回出血ノ原因トナル、某氏一驗アリ、夥シク
鼻血スル者、全身皮膚ノ細脈皆出血ス、而シテ血量
全ク補繕スルニ及テ、滲血消退ス、
出血シ死ニ陷ルハ、或ハ貴要部ノ麻痺、肺質、胸膜、

心室、或ハ續病、水腫、消耗熱、ニ由ルナリ、
預後

出血ハ、固ト諸般ノ疾患ヲ排除センカ為ニ發ス
ル有益抵抗ニシテ、妄リニ閉止ス可ラサル者多
キカ故ニ、預後ニハ、先ツ其有益出血分利ナルマ、
有害出血ナルマヲ、辨別スルヲ要トス、
有益出血

一 多血鬱積、急性熱、殊ニ少壯強實ノ人ニ於テ
適宜量ナル者、

二 貴要部ノ血液鬱積、多血ヲ無害ノ部ニ誘導
スル者、例之腦、肺ヨリ直腸、又子宮、鼻ノ粘液膜
ニ導キ、肝ノ閉塞ニ於テハ、門脈血ヲ直腸ニ誘
導スルノ類、

三 他病ニ襲替シ、之ニ由テ從前ノ疾患大ニ減
退シ、或ハ然ラサルモ、増進セサル者ハ、有益ニ
ノ且ツ要件ナリトス、月經病ニ於ケル出血ノ
如シ、

四 血中ニ含蓄スルルハ、大ニ全身ニ害アルハ
キノ排泄物ヲ、併セテ漏泄スル出血ハ、之ヲ清
血法ト稱スヘシ、自然ニ發スル出血ハ、少量ナ

ルモ、其効大ニ人工ニテ多量ニ放出スル者ヨ
リハ優レリ、

以上記スル所ノ出血、其有益、分利タルヲ決ス
ルニ足ル、但シ其最モ確實ナル證ハ、出血スル
ニ應シテ、從來ノ疾患減退輕快トナル者、是ナ
リ、

有害出血

一 貴要部ニ發スル者、腦、脊體、肺、胃、沕乙膜ノ空
隙ニ漏泄スル者、

二 感覺銳敏ノ部ニ於テ、焮衝ヲ續發スル者、

三 出血、全身ノ虚弱ヨリ發スル所ニテ、隨テ衰
弱ヲ増加スル者、凡ソ實性出血ハ益アリテ、虚
性出血ハ害アリ、悪性傍發出血ハ、出血スルニ
隨テ、諸症減退セス、却テ増進ス、

預後ニ關係スル要件アリ、凡ソ大脈管ノ器械性
損傷ヨリ來ル者、又健康ナラサル部ヨリ來ル者
勞瘵、癌腫ニ發スル者ハ、細脈管ヨリ發スル者ニ
比スレハ、危險ナリ、外部ノ出血、器械法又止血藥
ヲ施スニ便ナル部ニ於テスル者ハ、内部出血ヨ
リハ輕易ナリ、海綿狀組織、沕乙膜空隙ニ發スル

者ハ、粘液膜表部ニ發スル者ヨリハ危フシ、少年ノ人ハ害少ナケレド、高年ノ人ハ、出血スル毎ニ、諸機減衰ス、抑モ預後ノ要ハ、出血ノ原因ヲ除去スルノ難易ニ由ルナリ、最惡ノ徵ハ、出血留連シテ擣搦スル者、血液溶崩シテ水ノ如キ者、

治法

醫者先ツ次ノ一疑件ヲ解スヘシ、上ニ記スルカ如ク、諸般ノ出血、能ク疾患ヲ排泄スルニ足リテ、妄ニ之ヲ閉止スレハ、却テ害アル者多キカ故ニ、總テ之ヲ閉止シテ可ナル者ナルヤ如何、夫レ有

益出血、其量適宜之ヲ催進スヘキト多シ、若クハ過多ニ失セサレハ、醫者唯靜養法ヲ施コスヘシ、又一局部ヨリスル者ニテ、他部ニ害ナキ者ニ於テ亦然リ、患者ヲ靜息セシメ、身體ノ位置ヲ宜シクメ、出血スルノ部ニ血液輻進スルト勿ラシメ、患部ヲ稍高クス、軀血ハ起坐シ、下血ハ平卧ス、衣帶ヲ緩解シ、凡ソ血行ヲ妨クル所以ノ諸件ヲ除キ、清涼ニシテ刺衝ナキ食餌ヲ與ヒ、凡ソ良能ノ妙機ヲ妨クル所以ノ諸件ヲ避ケシム、其出血ヲ減少シ、或ハ之ヲ閉止スルトヲ要スル

者ハ、醫宜シク原因治法ヲ施セハ、自ラ止血法トナル可キヤヲ測ルヘシ、治法藥品共ニ此二般ノ効アル者ヲ最佳トス、但シ此二法ヲ併セ施コス1能ハサル者ニハ、先ツ原因治法ヲ處シ、次テ止血法ニ及フヘシ、出血ノ遠因已ニ去ルカ、或ハ之ヲ除去スル1能ハサル者ニ於テハ、治法ノ施コスヘキ者ナシ、例之創傷、零氣感動、脈管ノ内部平均ヲ失スル者等、各種合併症ノ原因ヲ詳カニスレハ、則テ原因治法ノ適宜ナル者ヲ得ヘシ、

治法ノ最要ハ、出血ノ實性、虚性ヲ知ルニ在リ、甲症ニハ、焮衝條ニ記スル所ノ消焮法ヲ處スヘシ、多血、鬱血ヲ分解スレハ、則テ止血法トナル、刺絡ヲ必須トセハ、血行大ニ减退シ、卒倒スルニ至ルヘシ、針孔ヲ大ニシ、大線ヲ為シテ迸出セシム、刺絡ハ血液ノ輻進ヲ減シ、疎通ノ効アリ、常ニ腕ノ靜脈ニ於テス、之ヲ刺セハ必然ニ、且ツ迅速ニ、隨意ノ量ヲ漏シ得ヘシ、唯下部ニ疎通スルヲ要スル時、例之月經閉止、多血ノ者ニ於テハ、脚ニ於テス、局部瀉血ハ、急劇ノ際

ニテハ即効ナシ、唯局部出血ニ疎通劑トナシ、
 出血後ノ鬱血ヲ排除スルニ用フルノミ、水蛭、
 角法ヲ施コスニハ、多血部ニ接通スルヲ勿レ、
 或ハ之カ為ニ、疼痛刺衝ヲ起シ、鬱血ヲ增多ス
 ルヲアリ、實性出血ニ於テ、刺絡ヲ施コシ、多血
 减退スルノ後、更ニ他ノ防瘀劑ヲ用ヒテ、其効
 ヲ助クヘシ、硝石、清涼ノ中和塩、最モ實芟答里
 斯葉ヲ良トス、是レ血行ヲ減殺シ、脈管ノ神經
 機能ヲ鎮靜シ、尿通ヲ增多ス、毎用四分瓜ノ一、
 至半瓜、毎二三時、

鬱血ノ原因、誘導法ニ宜シキ者ハ、發泡膏芥子
 泥、衝動性手浴、脚浴、乾角法、エノトス、氏排氣鐘
 及ヒ下劑ヲ用フ、而ノ之ヲ誘導スルノ部ハ、交
 感平時交感、病時交感アルノ地ヲ撰フヘシ、依ト氏既ニ
 曰ク、月經過多ノ者ニハ、乳房ニ角法ヲ貼スヘ
 シト、兼テ清涼ノ食餌、食量ヲ減節シ、植物性ノ
 清涼飲料、冷涼ノ零氣、精神身體ヲ靜養シ、凡ソ
 脈管ヲ刺戟スル所以ノ事件ヲ遠サケ、藁蓐ニ
 卧サシム、決シテ毛蓐ヲ用フルヲ勿レ、温被ス
 ルヲ勿レ、

消焮法ヲ施コスニハ、總テ患者ノ體質ニ隨フ
 ヘキ一固ヨリ論ナシ、神經鋭敏ナル者ニハ、瀉
 血スルヲ勿レ、或ハ之ヲ施コスモ、極テ微量ナ
 ルヘシ、然ラサレハ速カニ衰脱スレハナリ、故
 ニ寒冷、冷浴、冷溺、冷水飲用、鑛酸、阿芙蓉、及ヒ他
 ノ鎮靜シ、兼テ止血ノ効アル品ヲ用フルヲ佳
 トス、

一 寒冷ハ、局部ノ組織ヲ收縮シ、脈管ノ機能ヲ鎮
 定ス、而シテ其効能ク深ク内部ニ達ス、抑モ皮膚ノ
 知覺神經ヲ頓カニ犯シ、其効内部ノ脈管ニ連及
 シテ、出血ヲ鎮止シ、凡ソ出血閉止スヘキ者、又其
 他ノ分泌ヲ閉止スルモ害ナキ者ニハ、皆寒冷ヲ
 用フヘシ、

二 山物酸之ヲ内用スレハ、消焮止血劑ト、衝動止
 血劑トノ中間ノ効アリ、故ニ疑似ノ症、又敗血性
 出血ニ最モ佳ナリ、收斂亞的兒、磷酸、是ナリ、
 四肢ノ緊繫ヲ、實性、虚性出血ニ止血法ト為ス
 ハ、古人大ニ賞用スル所ナリ、之ニ由テ動脈血
 行ノ障害ナキ者ニ、靜脈血ノ還流ヲ遲徐ナラ
 シメ、以テ内部ノ血行ヲ妨ケ、速カニ卒倒ヲ發

レ止血ス、又動脈壓迫法、例之子宮出血ニ、大動脈ヲ壓迫スルハ、両性ノ出血ニ通シ用フ、

三、両性出血ニ通シ用フヘキ止血劑ニ屬スル者、

吐根催嘔法、每服半匁、二匁、每半時、一時、醋酸鉛一

匁、二匁、阿芙蓉四分匁ノ一、三分匁ノ一ヲ配シ、每

二時三時之ヲ用フ、麦奴四匁、十匁、每二時、或ハ其

効分、エルゴチ子ボニアン氏曰ク、エルゴチ子二

匁ハ、麦奴一匁ノ効ニ同シ、

エルゴチ子ハ、内外施用スヘシ、用例一錢ヲ蒸

溜水二匁ニ溶和シ、綿絲球ヲ漬シ、出血ノ部、鼻

孔、子宮頸ニ挿ム、アルナル氏ハ、内用ニハ麦奴

越幾斯ヲ賞ス、内部實性出血、殊ニ胃血、腸血ニ

麦奴越幾斯一ガ萬苴水百二十實亞格日温舍

利別三十六每一二時ニ、一食匙ヲ用フ、

帝列并底那油、但シ之ヲ焮衝性、實性出血ニハ、稀

ノ用フ、每三四時ニ、二十滴、

收斂性止血劑ハ、虚性出血ノミニ用フ、其品類甚

タ多シ、而ノ庸醫出血ノ原因、病性ヲ詳カニセズ

メ、之ヲ妄投スルハ、其害少ナカラス、此諸劑ハ、速

カニ第二道ニ達スル者ニ非ス、然ルニ外用ノ効

ヲ見テ、内用スルモ亦同効アルヘシトスルハ、臆
 斷ノミ、今之ヲ取ラス、抑モ之ヲ内用スレハ、胃腸
 粘液膜ノ神經ヲ刺戟シ、次テ、交感運營ニ由テ、患
 部ノ細脈ニ變動ヲ起シ、以テ効ヲ奏スル者ナル
 ハ疑ナキ所ナリ、

收斂性止血藥品類極テ多シ、或ハ之ヲ單用シ、
 或ハ諸品ヲ配用ス、今其最ナル者ヲ掲ク、没食
 子、没食酸、拳參、篤爾面室爾刺、刺答尼亞、
 方例、刺答尼亞根一ツ、蒸餾水^{十六}ニ浸シ、煮テ
 八ツヲ取り、收斂亞的兒一ツ、桂舍利別一ツ半

ヲ和シ、一時、二時毎ニ、一食匙ヲ與フ、^{リエン}氏方
 又方、刺答尼亞越幾斯、阿仙藥、^{各十}明礬、^四甘草
 末、^十右研和、一色トナス、一日三四色、^ホ氏方、^{クト}
 又方、刺答尼亞越幾斯、^二明礬、^半桂末、^一右調勻、
 二色ヲ一丸トナシ、毎三時、五丸、十九、^ラ氏方、^デウ

明礬

方例、明礬、^二吉納護謨、^四阿芙蓉、^三乳糖、^一右
 研和、六色ニ分テ、毎三時、一色ヲ服ス、^ホ氏方、^ゲ
 又方、明礬、^六阿芙蓉越幾斯、^一阿仙藥、^二右研
 和、六劑トナシ、二十四時間ニ用フ、^レ氏方、^カミ

吉納護謨、阿仙藥、帝列并底那油、坎百設木、檫皮、
結列阿曹篤、鐵劑、皓礬等是ナリ、各部出血ニハ、
各自ノ妙効品アリ、例之咳血ニハ食塩、勲血ニ
ハ陰囊冷濕法、子宮出血ニハ桂丁幾薩毘那ノ
如シ、

傍症治法、以テ劇甚ナル交感諸症ヲ鎮定ス、鎮瘳
法即テ是ナリ、患部ノ刺衝機ヲ亢起スル所以ノ
諸件ヲ避ク、例之吐血ニハ飲食ヲ禁シ、咯血ニハ
言談ヲ禁ス、麻醉法、轉換法、包攝劑、寒冷ニテ神經
ヲ遲鈍ニス、又持續シテ血液鬱積ヲ生スルノ刺

戟ヲ除去ス、腸ニ於テ灌腸法ヲ行フカ如シ、
出血後遺ス所ノ脈管系刺衝ハ、實艾答里斯、老利
兒水ノ治スル所ニ非ス、強壯性ノ食餌、鐵劑ヲ用
ヒテ之ヲ治スヘシ、

卒倒甚タシカラサル者ニハ、俄カニ刺戟衝動品
ヲ與フルコト勿レ、唯其血行全然絶止スヘキノ恐
アルキノミ、患者ヲ平卧セシメ、四肢足心ヲ撫摩
シ、芥子泥ヲ貼シ、胸部ニ冷水ヲ澆クヘシ、總テ暴
劇ノ衝動ヲ避ケ、輕卒倒ノ狀ナラシムルヲ要ス、
血行ノ遲滯スルハ、出血ノ再發ヲ防クニ宜シ、出

血後搖搦スル者ハ、位置ヲ適宜ニシ、動揺スルヲ勿ラシメ、勉テ身體、精神ヲ靜息シ、極テ甚シキ症ニハ輕量ノ阿芙蓉、實芙蓉、菲沃斯、葛私、篤僕、謨ヲ與ヘテ、神經機能ノ暴動ヲ鎮定スヘシ、出血ニ續發スル、焮衝、或ハ乏血ハ、法ニ隨テ治ヲ處スヘシ、

出血夥シキ者ニ、人血或ハ、獸血ヲ注入スル法アリ、往時賞用スル所ニノ、近時プレホスト氏、ヂユマス氏、シーノヘンバク氏、亦之ヲ施用シ能ク必死ヲ救フ者アレ氏、尚試驗ヲ俟ツ所ナ

リ、リアン氏曰ク、効アル者ハ、十中ノ一ノミト、止血後ノ養法ハ、出血ノ原因ト虚實ノ性トニ由ルヘシ、凡ソ飲食、努力、精神感動、大寒、大熱、衆人群集ノ地ハ、皆之ヲ避クヘシ、多血質ノ人ニ發スル大出血後ノ衰弱ハ、徐々ニ強壯ニスヘシ、則チ外氣、旅行、冷水浴、適度強壯ノ食餌、適度ノ運動ヲ取ラシメ、後漸ク有力ノ強壯法ニ移ルヘシ、虚性出血ノ者ニハ、時々刺絡シテ出血ヲ預防スヘシ、但シ必ス精意ナルヘシ、之ヲ誤用シ、習慣トナレハ、漸クニ其量ヲ増サ、ル可ラス、終ニ刺衝

機亢起シ、滋養不給、血行不整ナルニ至ル、殊ニ尋常出血ヲ閉止センカ為ニ施ス者ハ、最モ注意アルヘキナリ、

遺傳出血

此病ハ、一千七百九十年ノ頃、始テ發見スル所ニテ、其症候左ノ如シ、

幼稚ノ時ヨリ、偶然出血シ、或ハ些少ノ原因、輕微ノ創傷、衝撞、截斷、拔牙、壓迫、墜落、挫傷等ニ由テ、出血スルニアレハ、尋常止血劑ニテハ、閉止シ難キ者ナリ、此ノ如キ體質ノ人ニハ、輕微ノ創傷ハ、却テ重大ノ創傷ヨリハ危フシ、又或ハ偶發スルノミニテ、創傷ニテノ出血ハ、他人ヨリハ多カラサル者アリ、余近来二兒ヲ驗ス、共ニ斜視眼施術ノ

際ニ發スル者ナリ、出血スルハ、創傷ノ部、粘液膜
空隙、實質ヨリス、此血族ノ者、多クハ血腫ヲ發シ、
外部ニ出血セサルアリ、

血腫偶發ノ者アリ、又壓迫ニ由ルアリ、其大サ
一ナラス、多クハ生下後直チニ之ヲ發シ、經過
常ノ如ク、色ヲ變スルヲ血斑ノ如シ、創傷スレ
ハ、次テ危險ノ大出血ヲ發ス、血腫内含ム所、血
ノミナラス、細研セル答麻林度ノ如キ褐赤色
ノ液ト、粘稠ナル大塊トヲ混ス、殊ニ此血族ノ
女兒、幸ニ此遺傳病ヲ免カレ、又創傷スルモ

非常ノ大出血ヲ發スルヲナキ者モ、必ス血腫
ハ免カルヲ得ス、

創面、或ハ粘液膜、或ハ海綿體ヨリ發スルノ出血
多クハ暗色、稀薄ニ凝固セス、留連出血スル者
ニ於テハ、鮮紅、純紅、灰白色ニシテ、血水ノ如キアリ、
多クハ出血持續シテ、諸般ノ止血法効ナク、六日、
八日、或ハ更ニ久シク留連シ、卒倒、乏血トナリ、遂
ニ自ラ閉止スルヲアリ、

創傷出血ト、偶發出血トヲ混スルヲ勿レ、創傷後
直チニ出血セスノ、二三日後ニ發スルヲアリ、創

痕ノ結痂ヲ剝離スル後ノ如シ、其創所膿化スル者少ナシ、多クハ速カニ愈合シ、斑痕ヲ遺ス、

舍密法、又顯微鏡ヲ以テ、此病者ノ血ヲ驗スルニ、未タ其徵ヲ得ス、必シモ凝收性ヲ失スルニ非ス、ベスセレル氏曾テ驗ス、一兒六歳、蛛絲膜焮衝ニ罹リテ死ス、之ヲ解剖スルニ心ノ左室肥厚トナリ、内ニ白色凝固セル纖維質夥シキヲ見ル但シ從來此病者ノ屍ヲ驗スルニ、未タ正徵ヲ得ルヲナシ、頸靜脈ノ音アルハ、必見ノ一症ナリ、メイ子ル氏

溶崩性出血ニ陥リ易ケンモ是レ唯血液缺乏スル一由ル續症ナルノミ、然レモ多クハ出血前、或ハ出血中、諸般ノ症ヲ發ス、殊ニ煩悶、心悸動ナリ、又久シク出血スルヲナキ者ニハ、四肢及ヒ關節疼痛ヲ發スルヲアリ、疼痛、兼テ關節腫起シ、殊ニ膝ニ於テシ誤リ認テ痺麻質、或ハ痛風症ナリトシ、妄リニ治ヲ處スルヲアリ、

此患者、他ノ急性病、麻疹、猩紅熱、百日咳、肺焮衝等ヲ免カルニ非ス、之ニ罹レハ、傍發出血ヲ起シ易シ、但シ種痘ハ、出血スルヲ稀ニシ、經過整然ナリ、

原因

此病原發スル者亦例ナキニ非ス、父祖及ヒ血族ニ此病アルニ非ス、又其素質ヲ傳賦スヘキ者アルニ非スノ、之ヲ原發スル者アリ、但シ是レ極テ少ナキ所ニシテ、多クハ血族ノ遺傳ニ由リ、父祖、子孫ニ相傳フル者ナリ、遺傳スル一三四世ニ及フ者アリ、而シテ母ヨリ傳フル者多ク、父ヨリスルハ少ナシ、又女兒ハ之ヲ免カレテ、男屬ノ之ニ罹ル者アリ之ヲ要スルニ、婦女ハ免カル者多ク、男子ニ傳フル者多シ、但シ婦人、此素質ヲ具スレ

ハ經行中、産後ニハ、能ク注意スヘシ、資質及ヒ異質、以テ徵スヘキニ非ス、此血族三十九人ノ内、全然健康ナル者、十七人アリ、ランゲ氏以上記スルノ諸説ハ、地球北方ノ一半ニ於テ歴驗スル所ナリ、此病者極テ多キ地アリ、例之北亞米利加ミアン河、中列應ノ流ニ沿フノ地ノ如シ、ランゲ氏高位ノ地、海面ヲ抜ク一五千尺ナルカラ、一ウビユシテ、ルノ如キニモ、此病アリ、春時ノ寒暖晴雨ノ驟變、零氣ノ大熱、電雷ハ、出血ヲ促カシ、精神感動、身體勞役、亦然リ、

凡ソ此病ノ本態ヲ講究スル、諸家説アリト雖、未
 タ其全キヲ得ス、解剖法、舎密法、顯微鏡、未タ其詳
 ヲ得ス、心臟及ヒ大動脈肥厚モ、唯合併症ト云フ
 ヘキノミ、蓋シ此ノ如クナラサル者多ケレハナ
 リ、然ラハ則テ或ハ細脈管ノ形質、其凝收性減少
 スルヲ以テ、原因トナス可キ歟、故ニ今余其發見
 スル所ノ顯症ニ從テ、之ヲ出血條下ニ續テ記ス
 ルヲ至當ナリトス、其症候ハ、夫苟兒陪苦、血斑病、
 又赤斑病ニ類似スレモ、抑モ此病ハ、固ヨリ遺傳
 スル所ニテ、生下ヨリ固有ノ體格アリテ、他病ノ

如ク唯一時發見スル者トハ自ラ異ナリ、故ニ固
 形部、或ハ流動部ノ疾患ナリ、營養發成不全ノ續
 症ナリ、敗血病、又他ノ畸形ニ近キ者トス、
 經過、終歸、及預後、

遺傳病ノ顯著ナル症、血腫、出血ハ多クハ生下ノ
 日ニ既ニ之ヲ發シ、遲速ノ間歇アリテ、遂ニ衰脱
 シテ死ス、初歳ニ於テ其素因ヲ見ハレ、或ハ
 八歳、十一歳ニ及テ、始テ其徵ヲ見ル者アリ、是レ
 兄弟多ク幼年ニ於テ死スル者アルヲ以テ知ル
 ヘシ、兒愈幼稚ナレハ、愈危フシ、生下後直チニ其

症、鼻血ヲ發スル者ハ、必ス數日ニシテ死ス、幸ニノ情慾發動ノ期ヲ經過スレハ、能ク高年ニ至ルヲ得ルナリ、此患者五十二人ノ内、一歳内ニ死スル者五人、一歳ヨリ七歳ノ間ノ者、三十四人、七歳ヨリ二十歳ノ間ノ者十人、二十歳ヨリ五十歳ノ間ノ者三人ナリ、凡ソ此患者ハ、他病ニ於ケルカ如ク生力發成ノ期時令變換ノ候最モ危フシ、故ニ生牙ノ期、早春等ヲ危険ナリトス、其死スルハ、出血ニ由リ、乏血及ヒ其續症、水腫ニ由ル、小兒ハ或ハ急發癩癩ニ由ル、但シ此病遺傳

ヲ絶止スルノ期アリ、必シモ兄弟悉ク皆此病ニ罹ルニ非ス、ラング氏良能自ラ此病ヲ治スルハ、最モ早キモ二十五歳ヨリ、二十八歳ニ至ルノ間ナリ、或ハ痛風ニ轉スル者是アリ、可疑官吏亦此遺傳病ヲ知ルヲ要スルヲアリ、例之沃典宗ノ兒ヲ創傷スル時ノ如シ、輕微ノ創傷或ハ死ヲ致スヲアリ、

治法

此病ヲ治スルニハ、姑息法ノ外、他策ナシ實ニ歎スヘキノ極ナリ、其根治法、又妙効品ト稱スル者、

山物酸、就中硫酸、鐵劑、肝油、瀉利塩、裸麦奴、醋酸鉛、
 及ヒ血液注入法等ノ諸品、皆必然ノ効ナシ、
 姑息法、止血法、之ヲ施コスル難シ、多クハ皆効ナ
 シ、收斂品、縛帶法、亦効ナシ、何トナレハ、縛帶ヨリ
 以上ノ部ハ、腫起スレバナリ、壓迫法亦何レノ部
 ニモ施コシ得ヘキニ非ス、又之ヨリ以上ノ部ハ、
 腫脹、汚色、疼痛極テ甚タレク、再ヒ出血シテ血液
 流利ヲ得ルニ非サレハ、疼痛退カサルヲアリ、確
 實ノ効アル者ハ、烙鐵ナレト、亦是レ一時ノ効ノ
 也、其結痂剝離スレハ、復タ出血スルヲ初ノ如シ、

滴浴法或ハ効アリ、両手ヲ氷冷水中ニ漬ス、亦同
 シ、ナスセ氏ホルデーセ氏曾テ出血甚タレキ者
 ニ於テ、更ニ深ク截リテ、始テ効ヲ得シトアリ、ラ
 シグ氏曰ク、收斂品中、硫酸、及ヒ塩酸、鐵丁、幾、又酒
 精中ニ碯砂ヲ溶和スル者、最モ効アリト、
 此素質アル者ハ、攝生法ニ注意シ、些少ノ創傷
 ヲモ受クルト勿ラシムヘシ、醫者妄リニ水蛭、
 吸角、瀉血、切斷法ヲ施コスル勿ルヘシ、殊ニ生
 命危険ノ時期ニ於テハ、創傷性或ハ偶發出血
 ヲ誘起スル所以ノ諸件ヲ避クヘシ、此ノ悲酸

スヘキ遺傳病ノ根ヲ絶スルニハ、速カニ其血
族ヲ斷絶セシメ、之ヲノ他人ト婚嫁スルヲ
禁セシメ、ヲ希フノミ、

侃斯達篤卷之四終

存誠林先生藏板
泰西醫方二十四脈表
一枚摺

侍醫法眼信良坪井先生譯
侃斯達篤氏內科書
全一百八卷

侍醫法眼信良坪井先生譯
新藥百品考
初編二冊
二編二冊
全四冊

佐倉佐藤舜海先生譯
斯篤魯默兒砲痰論
全二冊

佐倉佐藤舜海先生譯
外科醫法
內編十五冊
外編廿二冊
全三十七冊

越中佐渡三良先生著

和蘭藥性歌

全二冊

米澤外井芳洲先生譯

醫療新書

全三十冊

倉次元意先生譯

眼科摘要

全部九冊

近刻

時醫法眼松本先生藏板

解剖羅旬語加類多

骨部

西洋風画入

山内氏藏板

漢字和譯附 英語可苗多



東都大門通難波町

發兌書林 英蘭堂 嶋村屋利助

